

両親のジェンダー観・夫婦関係と 大学生の愛着スタイルの関連

山野 莉瑚*・桂田恵美子**

要約：夫婦関係は幼児の愛着形成に影響し（数井・無藤・園田, 1996）、夫婦関係の一部である妻から夫への評価は妻のジェンダー観と夫の家事・育児従事の程度に左右される（久保, 2016）。故に、子どもの愛着形成には両親のジェンダー観が関与すると考えられる。本研究では、大学生とその両親を対象に、①大学生の愛着も両親の夫婦関係の影響を受けるのか②両親のジェンダー観が夫婦関係を媒介し子どもの愛着に影響するか③両親のジェンダー観の組み合わせが夫婦関係や子どもの愛着に影響するかの3点を検討した。その結果、①父親評価の夫婦関係が良いほど大学生の見捨てられ不安は低くなること②父親が平等的ジェンダー観を持つとき夫婦関係が良好になり、大学生の見捨てられ不安が低くなるという弱い効果があること③夫が伝統的、妻が平等的のジェンダー観の場合、両者平等的の夫婦に比べて夫婦関係は悪いが、子の愛着には影響が及ばないことが分かった。これらの結果から、子である大学生の愛着への影響は父親のジェンダー観が重要であることが示唆された。

キーワード：愛着、内的作業モデル、夫婦関係、ジェンダー観、性役割態度

子どもの発達や愛着形成に関して、多くは母子関係や母親の養育に注目して研究されている（数井・無藤・園田, 1996；福田・宮下, 2006）。しかし、2019年における日本人の家族構成は、共働き世帯が男性雇用者と専業主婦からなる世帯の倍以上であり（厚生労働省, 2020）、父親も養育者として無視できない存在であると思われる。

数井ら（1996）は、調和的で良好な夫婦関係が幼児の安定的な愛着の形成に関連することを示し、母親だけでなく、夫婦関係や家族機能が子どもの心理発達に影響することを明らかにした。また、福田・宮下（2006）は、父親と乳児の接触時間が長いほど、また、父子の接触時間が短くても夫婦関係が良好なほど子どもの愛着が安定することを示唆した。よって子どもの愛着形成には子どもまたは妻に対しての夫の接し方が関わると言えるだろう。

では、夫婦関係は何によって左右されるのだろうか。久保（2016）は、幼児のいる共働きの核家族を対象とした調査において、妻の「家事・育児は男性も行うべきだ」というジェンダー意識が高いと、夫の家事・育児従事に対する期待が高くなり、夫への家事・育児分担の評価が厳しくなることを示した。さらに、夫の家事・育児参加程度が高いと妻のジェンダー意識に関わらず評価が高くなることも明らかにした。つまり夫婦関係の一指標である妻からの夫への評価（不公平感）は妻のジェン

ダー観と夫の家事・育児の参加具合によって左右されると言える。また、その後の研究（久保, 2017）で、平等主義的なジェンダー観を持つ夫と妻に頼られている夫は家事・育児の頻度が高いことが示され、夫の家事・育児従事度と夫のジェンダー観は似た性質を持つことが考えられる。よって、夫婦関係には夫・妻のジェンダー観、夫の家事・育児従事度が関連すると言えるだろう。

以上の先行研究から、子どもの愛着形成には夫婦関係が関連し、夫婦関係には夫または妻のジェンダー観、夫の育児・家事の頻度が関連することが確認できた。そうすると、夫婦関係と関連のある子どもの愛着形成は、夫婦のジェンダー観や夫の家事・育児従事度と関連があるのではないかという疑問が生じる。例えば夫婦関係を媒介に、父親や母親のジェンダー観が子どもの愛着形成に影響しているのではないだろうか。

性役割分担を明確にせず、父母が適応的にやり取りして育児を行うことなどが子どもの愛着を安定させやすくするという数井ら（1996）の考察からも、夫婦それぞれが持つジェンダー観は、夫婦関係だけでなく、子の愛着形成にも関連があると考えられる。しかし、夫婦の持つジェンダー観や夫の家事育児の頻度と子どもの愛着形成との関連について調査している研究は少ない。また、冒頭で述べた通り、愛着研究では母親に着目されることは多いが、父親に着目する研究は多くない。久保の研究（2016, 2017）においては夫も調査に参加しているもの

*関西学院大学文学部総合心理科学科4年

**関西学院大学文学部教授

の、数井ら（1996）や福田ら（2006）の研究では夫婦関係や夫についての質問は妻が回答を行っており、夫自身が調査に参加している愛着研究も少ないと言えるだろう。さらに、上述した研究の対象者は全て乳幼児期の子どもとその親である。

そこで本研究では、大学生とその両親を調査対象とし、幼少期の子どもではなく、大学生の愛着スタイルも両親の夫婦関係の影響を受けるのかについて検討を行う。乳幼児期に形成された愛着は、その後、個人の心理表象である内的作業モデル（internal working model）として存在する（金政，2003）。ゆえに、成人の愛着である内的作業モデルも幼少期の愛着と同様に親の夫婦関係の影響を受けると予測される。

次に、両親のジェンダー観が夫婦関係を媒介し子どもの愛着形成に影響するかを検討する。両親の有するジェンダー観が夫婦関係の良好さに影響し、夫婦関係を通して子どもの愛着スタイルに影響を与えたと考えられる。

最後に、両親のジェンダー観の組み合わせによって夫婦関係の良好さや子どもの愛着スタイルに違いがあるのかを検討する。久保（2016, 2017）は、夫婦のジェンダー観の組み合わせが夫婦関係に影響することを示唆している。それを受け、本研究でも両親のジェンダー観の組み合わせに注目する。具体的には、夫のジェンダー観が伝統的で、妻のジェンダー観が平等的ならば、夫婦関係は悪くなり、子どもの愛着スタイルが不安定になることが考えられる。

方 法

調査参加者

調査参加者は四年制大学に通う大学生・大学院生とその両親であり、回答者は大学生 216 名（男性 55 名，女性 159 名，その他 2 名）とその母親 88 名，その父親 85 名であった。

本研究では、識別番号で親子を結び付けられなかった父親 4 名と母親 1 名、『この質問には「3 どちらでもない」と答えてください』といった質問項目に異なる回答をした大学生 2 名を除いた大学生 214 名（男性 55 名，女性 157 名，その他 2 名），母親 87 名，父親 81 名で分析を行った。大学生の平均年齢は 20.30 歳（範囲 18-23 歳），母親の平均年齢は 51.43 歳（範囲 44-64 歳），父親の平均年齢は 54.21 歳（範囲 44-67 歳）であった。なお、大学生・父親・母親の 3 名の回答が揃ったのは 72 組，大学生・父親のみの回答が回収されたのは 9 組，大学生・母親のみの回答が回収されたのは 15 組であった。

欠損値があるものについては、欠損値が含まれる尺度のみ、その参加者を除いて分析した。

調査内容

調査はオンラインまたは紙媒体の質問紙を用いて行われた。大学生に対しては、大学生自身から見た両親の夫婦関係、自身の愛着について質問した。両親に対しては、夫婦関係とジェンダー観について尋ねた。

夫婦関係に関する質問

山内・伊藤（2008）の両親の夫婦関係良好性尺度を用いた。「相手に対して優しくする」などの愛情因子の 12 項目と「話していてもすぐけんかになる」などの葛藤因子 7 項目と「相手に遠慮することがある」などの抑制因子 4 項目の計 23 項目から成る。各因子の α 係数は愛情因子が $\alpha = .93$ ，葛藤因子が $\alpha = .78$ ，抑制因子が $\alpha = .81$ と高い信頼性が確認されているが、愛情因子と葛藤因子は両親の関係性の捉え方に関わらず負の相関が見られた一方で、抑制因子は同質性が保たれていなかった（山内・伊藤，2008）。よって、本研究では抑制因子を除外した。

森・桂田（2017）はこの夫婦関係良好性尺度を、例えば「相手に対して優しくする」の項目を「両親は互いに優しい態度をとっている」などというように、両親の関係を評定するということがわかりやすいように書き換えており、同研究の中で $\alpha = .97$ と高い信頼性が確認されている。そこで、大学生から見た両親の夫婦関係について答える質問項目は森・桂田（2017）で使用された両親の関係を評定する仕様の項目を使用した。さらに、両親が自らの夫婦関係に答える質問については、父親用・母親用に書き換え、「相手」という表現を具体的に示した（「相手に対して優しくする」を父親用の項目では「妻に対して優しくする」、母親用の項目では「夫に対して優しくする」など）。本研究では各項目について「当てはまる」を 5、「当てはまらない」を 1 とした 5 件法で回答を求めた。葛藤因子 7 項目を逆転させ、愛情因子 12 項目と合算し算出した平均得点を大学生が回答したものを両親夫婦関係良好性得点，父親が回答したものを父夫婦関係良好性得点，母親が回答したものを母夫婦関係良好性得点とした。得点が高いほど評価者が夫婦関係が良好であると捉えていることを示す。また、本調査における Cronbach の α 係数は大学生の回答したものは .93，父親の回答したものは .91，母親の回答したものは .94 となり、それぞれ高い信頼性が確認された。

両親のジェンダー観に関する質問

鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）を用いた。これは男女の性役割態度について平等または伝統志向の程度を測定する平等主義的性役割態度スケール（the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes: SESRA）（鈴木，1991）を 40 項目から 15 項目に

短縮した尺度で、個人レベルにおける男女平等の1因子のみから成る。質問項目については、「結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく旧姓で通しても良い」などがある。同研究において、SESRA-Sは $\alpha = .91$ と高い信頼性が示されている。

本研究ではこの質問項目を父親と母親に尋ねた。「1あてはまらない」から「5あてはまる」の5件法で回答を求め、15項目の平均得点をそれぞれ父のジェンダー観得点、母のジェンダー観得点とした。得点が高いほど男女に対して平等志向的な態度を、低いほど伝統志向的な態度を有していることを示す。また、本調査におけるCronbachの α 係数は父親の回答したものについては.88、母親の回答したものについても.88と信頼性が確認された。

大学生の愛着スタイルについての質問

一般他者に対する愛着スタイルを測定するECR-GO(中尾・加藤, 2004)を用いた。「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」などの見捨てられ不安18項目と「私は人とあまり親密にならないようにしている」などの親密性の回避12項目の計30項目から構成される。同研究で見捨てられ不安は $\alpha = .90$ 、親密性の回避は $\alpha = .83$ と信頼性が確認されている。

本研究では「1全く当てはまらない」～「7非常によく当てはまる」の7件法で回答を求めた。因子別に平均得点を算出し、見捨てられ不安得点、親密性回避得点の2つの得点として扱った。本調査におけるCronbachの α 係数は見捨てられ不安得点で.92、親密性の回避得点で.75と信頼性が確認された。

手続き

本研究の調査は、2021年9月21日から11月4日までの間にオンライン上または、関西学院大学文学部の複数の対面授業の一部の時間を使って行われた。

大学生・両親の全員がオンライン上で回答した対象者については、まず大学生または大学生の子どもを持つ親に対して調査の協力を求めた。Google formで作成された大学生用、父親用、母親用のオンライン質問紙のURLを送り、自分に該当する質問紙に答えることを求め、さらに他の対象者である本人の親や子どもにも回答してもらうためにURLを送るよう伝えた。対面授業の場合は、大学生用の質問紙と父親用、母親用のオンライン質問紙にアクセス可能なQRコードを記載した紙を1部ずつ受講生に配布し、大学生が回答した質問紙を回収した後、他の対象者である家族にQRコードを読み込んでもらう、またはURLを送ることでオンライン質問紙に回答してもらうように求めた。

両親のどちらかがいないなどの事情がある場合は、大

学生自身が覚えている限りの過去の記憶で質問に答えられるようであれば自身の分だけでも回答するように求めた。オンライン・紙媒体それぞれの質問紙の初めのページには、研究の目的、注意事項、個人情報の保護を記載し、年齢、性別、親子を結び付けるための大学生の誕生日と電話番号下4桁を組み合わせた8桁の番号を回答する欄を設けた。

なお本研究の分析はHAD16_302(清水, 2016)を使用して行った。

結 果

各尺度の相関について

各尺度で相関分析を行った結果をTable 1に示した。

両親関係良好性得点と父夫婦関係良好性得点($r = .33, p < .01$)、母夫婦関係良好性得点($r = .44, p < .01$)、父夫婦関係良好性得点と母夫婦関係良好性得点に有意な正の相関がみられ($r = .55, p < .01$)、父親・母親・大学生は夫婦関係を同じように認識していることがわかった。

父のジェンダー観得点と父夫婦関係良好性得点($r = .40, p < .01$)、母夫婦関係良好性得点($r = .35, p < .01$)に有意な正の相関がみられたことから、父親のジェンダー観が平等的であるほど夫婦ともに夫婦関係を良好であると評価することが示された。その一方で、母のジェンダー観得点は父夫婦関係良好性得点、母夫婦関係良好性得点の双方と有意な相関を示さなかった。

また、父親のジェンダー観得点と大学生の見捨てられ不安得点に有意な負の相関($r = -.27, p < .05$)、父夫婦関係良好性得点と大学生の見捨てられ不安得点に有意な負の相関($r = -.22, p < .05$)がみられた。これらから、父親のジェンダー観・父親の夫婦関係に対する認識が大学生の愛着スタイルと関連があることが示された。

両親の夫婦関係と大学生の愛着スタイルの関連について

まず、愛着スタイルを4つに分類した。片岡・園田(2008)を参考に、親密性の回避得点と見捨てられ不安得点の平均値でそれぞれ低群と高群に分割し、親密性の回避・見捨てられ不安の順で、低群・低群の場合は安定型、高群・低群の場合は拒絶型、低群・高群の場合はとらわれ型、高群・高群の場合は恐れ型と分類した。大学生全体で、安定型は49人、拒絶型は53人、とらわれ型は48人、恐れ型は62人、父親の回答があった大学生では、安定型が19人、拒絶型が17人、とらわれ型が19人、恐れ型が26人、母親の回答があった大学生では、安定型が21人、拒絶型が18人、とらわれ型が20人、恐れ型が28人であった。

大学生の愛着スタイルが両親の夫婦関係の影響を受けるかを検討するため、愛着スタイルの4分類を独立変数、大学生と両親が認知している夫婦関係を従属変数と

した1要因分散分析を行った。従属変数を両親関係良好性得点とした場合 ($F(3,208) = 0.55, ns$)、父夫婦関係良好性得点をした場合 ($F(3,77) = 0.60, ns$)、母夫婦関係良好性得点にした場合 ($F(3,83) = 0.64, ns$)、いずれも愛着スタイルの主効果は有意ではなかった。よって、大学生の愛着スタイル別で両親の夫婦関係の良好性に差異がないことが示された。

両親のジェンダー観と大学生の愛着の関連と媒介効果について

次に、両親のジェンダー観が夫婦関係を媒介し子どもの愛着に影響するかを検討するために、両親のジェンダー観を説明変数、大学生と両親が評価した夫婦関係を媒介変数、子の愛着得点を目的変数とした媒介分析を行った。その結果、父のジェンダー観得点を説明変数、見捨てられ不安得点を目的変数とした回帰分析において、父のジェンダー観得点は見捨てられ不安得点を予測する有意傾向がみられた ($\beta = -0.23, SD = 0.18, t(70) = -1.96, p = .054$)。尚、父のジェンダー観得点を説明変数、親密性の回避得点を目的変数とした場合、説明変数は目的変数を予測できなかった。母のジェンダー観得点を説明変数とした場合も目的変数である子の愛着を予測できなかった。

父のジェンダー観得点を説明変数、見捨てられ不安得点を目的変数とした回帰分析に対して、さらに母夫婦関係良好性得点を説明変数に追加した結果、母夫婦関係良好性得点は見捨てられ不安得点を予測する有意傾向があり ($\beta = -0.22, SD = 0.17, t(69) = -1.79, p = 0.78$)、一方で父のジェンダー観の効果は非有意になった ($\beta = -0.15, SD = 0.19, t(69) = -1.23, p = .223$) (Figure 1 参照)。間接効果の検定 (Bootstrap 法, 2000 回) の結果、95% 信頼区間 $[-0.292, 0.006]$ では有意な媒介効果が認められなかったが、90% 信頼区間 $[-0.261, -0.017]$ は0を含んでいなかったため、母夫婦関係良好性得点に有意傾向の媒介効果が認められた。尚、媒介変数を両親関係良好性得点、父夫婦関係良好性得点とした場合、媒介変数は目的変数を予測できなかった。以上の

ことから、親のジェンダー観のうち、父親のジェンダー観は母親評価の夫婦関係を媒介して子どもの愛着スタイルのうち見捨てられ不安に傾向ではあるが、影響することが示された。

夫婦のジェンダー観の組み合わせと夫婦関係、大学生の愛着との関連について

まず両親のジェンダー観得点をそれぞれ平均点 (夫: 3.80, 妻: 3.92) より高いものを高群, 低いものを低群とした。夫婦ともに低群のグループを伝統志向夫婦 (21組)、夫が低群で妻が高群のグループを夫低妻高夫婦 (16組)、夫が高群で妻が低群のグループを夫高妻低夫婦 (12組)、夫婦ともに高群のグループを平等志向夫婦 (23組) と名付けた。

夫婦のジェンダー観の組み合わせが夫婦関係と関連しているのかを検証するため、この組み合わせを独立変数、大学生と両親が認知する夫婦関係を従属変数とした1要因分散分析を行った。両親関係良好性得点を従属変数とした場合、夫婦のジェンダー観の組み合わせの主効果は有意ではなかった ($F(3,68) = 1.69, ns$)。母夫婦関係良好性得点を従属変数とした場合、夫婦のジェンダー観組み合わせの主効果が有意傾向であった ($F(3,68) = 2.28, p = .088$)。Holm 法による多重比較の結果、各群の間に有意な差は見られなかった。父夫婦関係良好性得点を従属変数とした場合、夫婦のジェンダー観の組み合わせの主効果が有意となった ($F(3,68) = 3.91, p = .012$)。Holm 法による多重比較の結果、平等志向夫婦 ($M =$

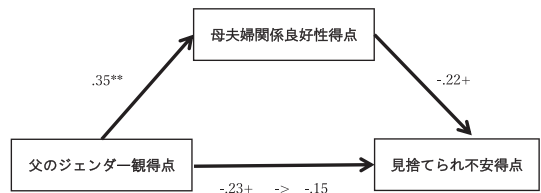


Figure 1 夫婦関係を通じた父のジェンダーから子の見捨てられ不安得点への影響
※表示している係数は標準化係数
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 1 各尺度の相関

	両親関係	父夫婦関係	母夫婦関係	父ジェンダー観	母ジェンダー観	親密性回避	見捨てられ不安
両親関係良好性得点	1.000						
父夫婦関係良好性得点	.325**	1.000					
母夫婦関係良好性得点	.438**	.553**	1.000				
父のジェンダー観得点	.172	.400**	.353**	1.000			
母のジェンダー観得点	.145	.138	.164	.291*	1.000		
親密性の回避	-.018	-.004	-.111	-.087	-.126	1.000	
見捨てられ不安	-.105	-.221*	-.126	-.270*	-.037	.096	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

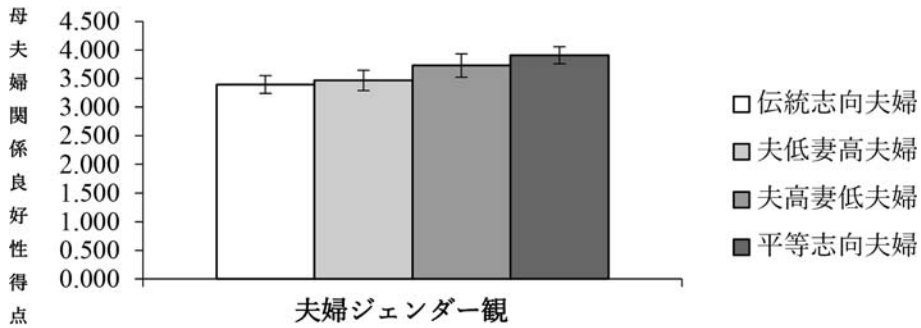


Figure 2 夫婦ジェンダー観の組み合わせごとの母夫婦関係良好性得点。エラーバーは標準誤差。

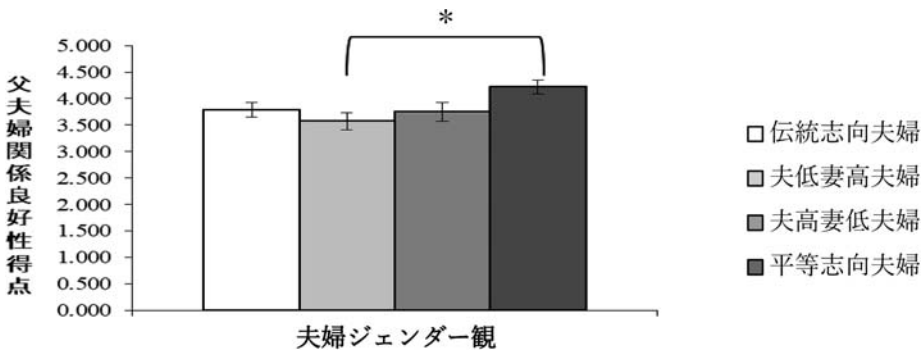


Figure 3 夫婦ジェンダー観の組み合わせごとの父夫婦関係良好性得点。エラーバーは標準誤差。

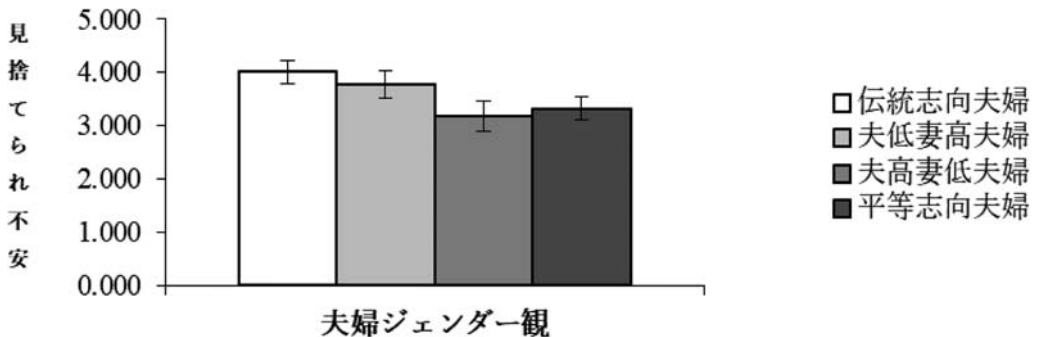


Figure 4 夫婦のジェンダー観の組み合わせごとの大学生の見捨てられ不安得点。エラーバーは標準誤差。

4.22, $SD = 0.13$) が夫低妻高夫婦 ($M = 3.57, SD = 0.16$) よりも有意に高かった ($t(68) = -3.19, padj = .013, \eta^2 = -1.016$)。他の群間には有意な差は見られなかった。Figure 2には夫婦ジェンダー観の組み合わせごとの母夫婦関係良好性得点を示した。縦軸は母夫婦関係良好性得点、横軸は夫婦のジェンダー観の組み合わせ、エラーバーは標準誤差を示す。Figure 3は夫婦ジェンダー観の組み合わせごとの父夫婦関係良好性得点を示した。縦軸は父夫婦関係良好性得点、横軸は夫婦のジェンダー観の組み合わせ、エラーバーは標準誤差を示す。

次に両親のジェンダー観の組み合わせにより、その子どもである大学生の愛着に違いがみられるのかを見るために、夫婦のジェンダー観の組み合わせを独立変数、大学生の愛着スタイル(見捨てられ不安得点・親密性の回避得点)を従属変数とした1要因分散分析を行った。親密性の回避得点を従属変数としたところ、夫婦のジェンダー観の組み合わせの主効果は有意ではなかった ($F(3,68) = 1.45, ns$)。見捨てられ不安得点を従属変数としたところ、夫婦のジェンダー観の組み合わせの主効果は有意傾向であった ($F(3,68) = 2.59, p = .054$)。Holm法

による多重比較の結果、各群の間に有意な差は見られなかった。Figure 4には夫婦のジェンダー観の組み合わせごとの大学生の見捨てられ不安得点を示した。縦軸は見捨てられ不安得点、横軸は夫婦のジェンダー観の組み合わせ、エラーバーは標準誤差を示す。多重比較で有意な差は示されなかったが、伝統的志向夫婦 ($M = 4.00, SD = 0.22$) と夫低妻高夫婦 ($M = 3.77, SD = 0.25$) の子どもの見捨てられ不安が高く、夫高妻低夫婦 ($M = 3.18, SD = 0.29$) と平等志向夫婦 ($M = 3.32, SD = 0.21$) の子どもの見捨てられ不安が低いことが見て取れる。

考 察

本研究は、両親の夫婦関係は大学生の愛着スタイルに影響するか、両親のジェンダー観が夫婦関係を媒介して大学生の愛着に影響するか、夫婦のジェンダー観の組み合わせが夫婦関係と大学生の愛着に影響するかの3点を検討するために行われた。調査は大学生とその両親を対象に対面・オンラインの双方の質問紙によって実施された。以下、得られた結果について考察する。

親の夫婦関係良好性と大学生の愛着の関連について

両親の夫婦関係の良好性は子である大学生の愛着スタイルを4タイプに分け、比較した場合、差がないことが示された。その一方で、親密性の回避得点と見捨てられ不安得点の2尺度として扱った相関分析では、父が夫婦関係を良好であると思っていると、子である大学生の見捨てられ不安が低いという結果が示された。また、媒介分析では、母が夫婦関係を良好であると思っていると大学生の見捨てられ不安が低くなる傾向が示された。

尾形・舟橋 (2016) は、父子関係において夫婦関係の良好さは安定的父子関係・依存的父子関係の双方に正の影響があり、安定的父子関係が形成された場合は子の見捨てられ不安が軽減されること、依存的父子関係が形成された場合は親密性希求が増加され、同時に夫婦関係の良好性が直接子どもの見捨てられ不安の軽減に繋がることを示唆した。また、夫婦関係が良好なほど母子関係が安定的になり、母子関係が安定的であれば子の見捨てられ不安が軽減するとも述べている。本研究の結果も強くはないが、両親の良好な夫婦関係は子どもの見捨てられ不安を軽減することを示唆した。

親密性の回避について夫婦関係からの影響が見られなかった点については、本調査は調査に協力した大学生が自分の両親に調査協力を求める場合が主であったため、両親に気軽に調査協力を求められる関係性でないと両親からの回答が得られないという限界があった。それにより、親子関係が安定的である家族が多く、親密性の回避には影響が見られなかったと考えられる。親密性の回避に影響が見られなかったことから、親密性の回避の程度

を分類条件に含む愛着スタイル別で夫婦関係の良好さを比較した場合も差が生まれなかったと考えられる。

本研究では、親の夫婦関係の良好性は、子が大学生であっても弱いながら子の愛着に影響していることが示されたと言える。

親のジェンダー観と大学生の愛着の関連について

媒介分析において父のジェンダー観得点は母夫婦関係良好性得点に正のパスを示し、相関分析においても、父のジェンダー観得点は父親・母親がそれぞれ評価した夫婦関係良好性得点と正の相関を示した。よって、父親のジェンダー観が平等的であるほど夫婦関係が良好であることが認められた。一方で母親のジェンダー観については誰が評価した夫婦関係良好性得点とも相関が見られなかった。この結果は、夫の家事・育児参加度が高い場合、妻のジェンダー観に関わらず妻の夫に対する評価が高くなるという久保 (2016) の研究結果に通じる。

また、父親の平等的ジェンダー観は母親の評価した夫婦関係の良好性を媒介して、子である大学生の見捨てられ不安を軽減する効果が示唆された。しかしながら、母親のジェンダー観は同様の効果を示さなかった。このことから、子の愛着への影響は父親のジェンダー観が重要であると言えるだろう。

夫婦のジェンダー観の組み合わせと夫婦関係、大学生の愛着について

夫婦関係や子の愛着に関して父親のジェンダー観の重要性が示されたが、夫婦のジェンダー観の組み合わせによる影響もあるのではないかと考え分析した結果、平等志向夫婦が夫低妻高夫婦 (夫伝統的・妻平等的) よりも夫婦関係が良好であることが示された。よって夫のジェンダー観が伝統的で、妻のジェンダー観が平等的ならば、夫婦関係は悪くなるという予測は支持された。また、子である大学生の愛着との関連では、見捨てられ不安においてのみ有意傾向ではあるがジェンダー観の組み合わせによる差が見られた。組み合わせ間の明確な差は示されなかったが、伝統志向の夫婦の子は平等志向の夫婦や夫高妻低の子よりも見捨てられ不安が高い傾向が見られた。これらの結果からも夫 (父親) のジェンダー観の影響が大きいことがうかがえるが、同時に夫婦ともに平等志向であることが、夫婦関係や子の愛着には重要であることが見て取れる。

本研究の限界と課題

最後に、本研究の限界について言及する。1点目は先述したように、調査方法により親子関係が比較的良好でないと両親からの回答が得られなかったと考えられることだ。今後の研究では、大学生の自宅に直接質問紙を郵

送し、両親に回答してもらうという方法が望まれる。2点目はサンプルサイズが小さかったことだ。大学生のみであれば200以上の回答があったが、大学生と両親の3人をセットにした場合、72組の回答しか得られなかった。そのため、3人の回答を反映した分析ではサンプルサイズが72に限られてしまった。

また、本研究において、両親の夫婦関係は大学生の愛着スタイル全般に影響があるとは言えない結果であった。一般他者に対する愛着測定具である ECR-GO を使用したことが理由として考えられる。中尾・加藤(2004)によると、ECR-GO で想起された愛着対象は、友人が58.99%、恋人が17.81%、家族が13.89%である。そのため、内的作業モデルを測定できているが親に特化した愛着ではないため、両親の夫婦関係からの影響は認められにくかったのだろう。愛着対象を親とした測定具(例えば、Inventory of Parent and Peer Attachment など)を使用した場合、今回よりも媒介効果が大きい可能性が考えられる。その場合、「親のジェンダー観→両親の夫婦関係の良好性→子どもの愛着スタイル」という、親のジェンダー観が夫婦関係を媒介して子どもの愛着に影響する流れがはっきりと見られるのではないかと予想される。以上を今後の課題としたい。

引用文献

- 福田香織・宮下一博(2006). 子どものアタッチメント安定性と夫婦関係との関連－父子接触時間の長い家庭と短い家庭での相違－ 千葉大学教育学部研究紀要, 54, 7-13.
- 金政祐司(2003). 成人の愛着スタイル研究の概念と今後の展望－現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは－ 対人社会心理学研究, 3, 73-84.
- 片岡 祥・園田直子(2008). 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について 久留米大学心理学研究, 7, 11-18.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘(1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係－幼児を持つ家族について－ 発達心理学, 7(1), 31-40.
- 厚生労働省(2020). 図表 1-1-3 共働き等世帯数の年次推移 令和2年版厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える－(本文) Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/02-01-01-03.html> (2021年7月13日)
- 久保桂子(2016). 共働き夫婦における夫の家事・育児参加に対する妻の評価 日本家政学会誌, 67(8), 447-454.
- 久保桂子(2017). 共働き夫婦の家事・育児分担の実態 日本労働研究雑誌, 689, 17-27
- 森 香織・桂田恵美子(2017). 両親の夫婦関係が子供の結婚願望に及ぼす影響について－子供の目に映る両親の結婚生活コミットメント及び夫婦仲との関連から－ 関西学院大学心理科学研究, 43, 25-32.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学紀要, 5, 19-27.
- 尾形和男・舟橋真緒(2016). 夫婦関係が幼児期の父子関係イメージ・母子関係イメージ, 高校生の愛着スタイル, 対人関係に及ぼす影響－幼少期と高校時代についての回想から－ 愛知教育大学研究報告. 教育科学編(65), 75-84.
- 清水裕士(2006). フリーの統計分析ソフト HAD－機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案－ メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 鈴木淳子(1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65(1), 34-41.
- 山内星子・伊藤大幸(2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響－青年自身の恋愛関係を媒介変数として－ 発達心理学研究, 19(3), 294-304.